

大東アーカイブス第5回企画展

大東文化学院創設をめぐる人々(1)

～井上哲次郎・新資料の紹介～

展示期間：平成20年4月1日(火)～平成20年9月26日(金)

(開室時間 毎週月～金曜日9:00～17:00)

展示場所：大東文化歴史資料館 展示室 (板橋校舎2号館1階)

大東文化歴史資料館では、本学創設期の指導者群像を確かなものとし明らかにしていくために、その関係資料を収集・整理しつつ、順次公開することを予定しています。

現在、展示室ではその第1弾として、当資料館が所蔵する大東文化学院第2代総長・井上哲次郎関係資料の一部を公開しています。

哲次郎が大木遠吉(大東文化協会初代会頭)、牧野謙次郎(大東文化学院教授)、土屋久泰(第14代総長・新制大学初代学長)等学院関係者と交わした書簡類をはじめとして、在任中に起きた事件に関する新聞記事、また自筆原稿や講演筆記録、雑誌『大東文化』に掲載された哲次郎の論稿数点などを、多くの写真とあわせて展示しています。



(自宅書斎での井上哲次郎・
大東文化学院総長在任中の1925年頃)

井上 哲次郎 [1855(安政2)年～1944(昭和19)年]

明治・大正期に活躍した哲学者。号は巽軒。筑前国(福岡県)大宰府出身。東京大学哲学科卒業。1882(明治15)年に外山正一・矢田部良吉らと「新体詩抄」を刊行し、世間に名を知らしめた。東京大学助教授在任中の1884年よりドイツに留学し、東西哲学を追及する。この時、ドイツ留学中の森鷗外とも知遇の機会を得たという。1890年6月の帰国と同時に日本人としてはじめて東京帝国大学文学部哲学科教授に就任した。1923(大正12)年退官。

教育勅語発布の翌年1891年9月に教育勅語の注釈書『勅語衍義』を著し、その哲学的基礎付けをあたえた。また「教育と宗教との衝突」を雑誌に連載し、キリスト教を反国体的宗教として排撃し、大きな反響をよぶ。その後、一貫して天皇制国家における国民道徳のあり方を論じた。

1922(大正13)年10月より大東文化学院教授・同教授会長に就任し、1925年2月より1926年10月まで大東文化学院第2代総長をつとめた。雑誌『大東文化』にも創刊号(大正13年3月)より数回にわたり論説を寄稿するなどしている。哲次郎は総長在任中、大東文化協会とともに「学院改革案」を発案するが、それが発端となり「学院紛擾」を引き起こすこととなった。帝大型の教授方針である「改革案」を推進する官学派教授陣に対し、早稲田系学者を中心とした私学派教授陣が反発し、罷免者や辞職者が多発したのである。争いは学生間にも波及し退学者が続出するという混乱状態を招くこととなり、騒動が鎮静化するのには哲次郎辞任後の1928(昭和3)年頃であった。また、同時期に哲次郎の著作『我国体と国民道徳』における三種の神器の解釈を「不敬」とする非難が起こったことから、問題拡大を避けるために哲次郎は大東文化学院総長を含む一切の公職を辞任することとなった。

哲次郎は1892(明治25)年より1944(昭和19)年12月に亡くなるまで、小石川区表町(現、文京区小石川3丁目)に住んだ。住居は昭和20年に戦火で消失したが、二つの書庫(土蔵)は今も残されている。井上哲次郎邸跡は昭和27年より東京都文化指定史跡の指定がなされ、「文京区立井上児童遊園」として現在も地域の人々に親しまれている。

(大東文化歴史資料館・浅沼 薫奈)



(現在の井上児童遊園)

大東アーカイブスの動き

～井上哲次郎関係資料を一括入手しました～

大東文化歴史資料館では昨年度、約350点の井上哲次郎(大東文化学院第2代総長)関係資料を入手しました。

井上哲次郎は1924(大正13)年10月に大東文化学院教授・同教授会長に就任し、1925年2月～1926年10月まで大東文化学院第2代総長をつとめた人物です。

今回入手した資料は、哲次郎が九州から開成学校入学のため上京した時(明治8年)のものから大東文化学院在職中(大正15年頃)、最晩年(昭和10年代)に撮られたものまでの50点あまりの貴重な写真をはじめとして、大学関係者・親族・友人らと生涯にわたって交わした大量の書簡類、直筆原稿、講演筆記録、卒業証書、海外渡航関係書類、友人縁者に配ったと見られる自作の漢詩が書かれた扇子など、多岐にわたる内容です。

現在、第5回企画展としてその一部を公開していますが、今後整理・研究を進め、順次公開していく予定です。

